
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 197

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3921. 今自己に起きていること
- 3922. 欧州の駅と親友の再会に関する夢
- 3923. 解放と苦悩
- 3924. 目覚めと真の教育
- 3925. 形象化と自我の自己否定
- 3926. 今朝方の夢
- 3927. 生活への旅の流入:オランダでの生活について
- 3928. 呪縛の証としての才能
- 3929. オランダの医療:不本意な現実と変容
- 3930. 今朝方の夢
- 3931. 夢の振り返り:絶え間ない変化の中で
- 3932. 欧州での四年目の生活に向けて
- 3933. 永井荷風の日記:欧州生活四年目のあり方
- 3934. 音楽宇宙の長期的拡張に向けて:これからの協働について
- 3935. 早朝に思う今後の旅先
- 3936. 今朝方の夢
- 3937. 友人との対話より
- 3938. 創造物と時空間の奥行き
- 3939. デン・ハーグとの縁および客死について
- 3940. 今朝方の夢

3921. 今自己に起きていること

時刻は午後八時半を迎えた。パリからフローニンゲンに戻ってきての初日が、今ゆっくりと終わりに向かっている。

この夏からの生活地の変更に伴い、幾分自分の心が動いているのを感じる。そこには自己を揺さぶる波がある。生活地を変えることは、こうした自己への揺さぶりをもたらすことは予想できていたのだが、実際にそれが起こってみると、この現象と冷静に向き合う必要性を感じている。こうした一つの体験を蔑ろにするのではなく、それと時間をかけて向き合うことをとにかく大切にしたい。それを行う方法は、文章を書くことと曲を作ることしか自分にはない。上記において、今自分が体験していることを自己を揺さぶる現象だと形容したが、実際には幾分動揺しているのだと思う。

この八年間において、私は何度も生活拠点を変えてきたが、それはやはり自己に大きな負担を強いる体験だったことがわかる。確かにそれは、自己を涵養する上で極めて重要なものなのだが、自己を涵養させることそのものの意義を疑い、自己が発達してしまったことに伴う痛みや苦悩にどうしても意識が向かう。

正直なところ、今の私は、この人生をいかに生きていくのかに関して再考を迫られている。今後も探究活動と創造活動を継続していくことは間違いないが、これまで欧米での探究生活で培ってきた知見を、過去に全く関与してこなかった領域で役立てていくことはできないかと考え始めている。

こうした新たな挑戦に向かおうとしているのは、今の自分が生活地の変更に伴い、不安定な状態にあるからなのだろうか。それとも、発達空間において、これまでの地点から別の地点に大きく振り子を動かそうとしている健全な動きなのだろうか。はたまた、それらの両方なのだろうか。

自己をいかにこの社会と関係づけていくか、自分の役割とは一体何であり、いかに日々を生きていくべきかに関して、深く大きな問いを突きつけられているように感じる。こうした発達上の課題に合わせて、ライフサイクル上の課題も浮上してきていることに気づく。確かに現在の自分の年齢を考えると、永住の地を今決定する必要はないのかもしれないが、そうした地を真剣に探し始めている自分がいる。

自分の魂は依然として遍歴を続けている一方で、安住の地を探し始めているのを感じる。だが今の私はそれがどこなのか皆目見当がつかず、そこに一つの苦悩がある。ある場所に永住することなど全く想像できない自分と、ある場所で安住することを求める相反する自分がいる。発達課題は、いつも対極性を孕む。おそらく、物理的にどこかの地で安住するのかしないのかの背景には、精神的により重要な対極的な課題があるだろう。今はそれが何なのかが明確にはわからない。

人はその短い人生をどのような意味を携えていかに生きていくのだろうか。そのような問いが依然として付きまとう。

人生がまた混迷なものに思えてくる。人生そのものと人生の意味が混迷な最中、私の自己はこの世界に向かって開こうとしているのを今日も実感した。それは、かかりつけの美容師のメルヴィンとの対話によってもたらされたものである。

自己は本当にこの世界に対して開こうとしているのだ、そうした特性を人間の自己が持ち得ることは、理論上理解しているつもりであった。だがそれが、実際に今この瞬間に自分の身に降りかかってくると、その体験が持つ重さに押しつぶされそうになってしまう。ここでも、自己を押しつぶし、再び自己を閉鎖的なものにしようとする運動と、自己を解放し、自己を外側に開いていこうとする運動の二つを見る。

人間の生涯にわたる変容過程は、楽になる方向に向かっていくわけでも、苦悩が単に深まる方向に向かっていくわけでもないことがわかる。解放への道と苦悩への道のどちらもが含まれている。いや、人間の変容過程には、解放と苦悩を超えた何かがありそうだということがもう薄々と見え始めている。その輪郭をより鮮明なものにするために、現在の苦悩があるのだろうか。フローニンゲン：

2019/3/5(火) 20:49

3922. 欧州の駅と親友の再会に関する夢

今朝は六時半過ぎに起床し、七時を少し回ったところで一日の活動を始めた。パリから戻ってきての三日目の朝は、小雨が少々降っている。今日は一日を通して、小雨が降ることが多いようだ。

パリから戻ってきて数日が経つが、フローニンゲンという町が自分にとって欧州での故郷となっているためか、ここでの生活を再開させることは非常にズムズだ。今、一羽の鳥が大きな鳴き声を上げながらどこかに飛び去っていった。そう、このように鳥の鳴き声を聞きながら、時には雨音に耳を傾けながら、自然と町が見事に調和したこの街で落ち着いた生活を送ることができている。そうした環境の中で、今日も自らのライフワークに従事していく。

パリの旅行の最中は、一日ほど全く夢を見ない日があったことが記憶に新しい。フローニンゲンに戻ってきてからは、これまで通り夢を見ている。まずは今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、欧州のどこかの国の駅にいた。そこは、先日訪れたパリ北駅のように思えたし、あるいはロンドンのセントパンクラス駅のように思えた。

辺りは少し薄暗く、私は駅構内を何気なく歩いており、これから自分が乗る列車のプラットフォームに向かっていた。すると、電光掲示板の下に、小中高時代の親友(SI)がいることに気づいた。私は彼と本当に仲が良かったので、このような場所で再会できたことが嬉しく、私は彼に話しかけた。だが、残念ながら、彼に話しかけた後にどのようなやり取りがなされ、その後私たちはどこに向かったのかは覚えていない。

彼との会話から得られた感覚だけが、今自分の内側に残っている。それは友との再会に伴う喜びであり、嬉しさというシンプルな感情であった。再会の瞬間に感じた喜びは黄色をしており、そこから徐々に嬉しさの感覚に移行するに従って、感情の色がオレンジ色になっていったような印象がある。

次の夢の場面では、これまた私は、欧州のどこかの国の別の駅にいた。今度は、小中高時代の別の親友(SS)と再会を果たすことになった。そこでも私は、彼との再会を喜ぶ感情に包まれていたのだが、彼は何やら今クイズの問題を解いている最中とのことであり、その話を聞いた瞬間に、私の内側は喜びというよりも、好奇心に満たされた。なぜだかその好奇心は、明るい色ではなく、知性を司る銀色を帯びていた。私の内側は銀色の好奇心で満たされており、その状態で彼の話を聞くことにした。どのような問題が出題されているのかに関心があり、それについて詳しく話を聞いてみると、それは一筋縄ではいかないような問題であった。この夢に関しても、そこからどのような展開が見られたのかは覚えていない。

二つの夢は共通して、欧州の駅が舞台になっており、親友との再会が主題になっていた。欧州の駅は何を象徴しており、親友との再会は何を意味しているのだろうか。それらの点に関心の矢が向かう。

そういえば、昨日にかかりつけの美容師のメルヴィンに髪を切ってもらっている最中に、「明晰夢」に関する話題となったことを思い出す。今から十年以上も前に、メルヴィンが十代の後半だった時に、フローニンゲンの隣町であるアッセンで、車を修理している中国人に何気なく話しかけたことがあったそうだ。そこで彼は、その中国人から、明晰夢を見る方法について伝授されたという話を昨日聞いた。それ以降、メルヴィンは頻繁に明晰夢を見るようになったと言う。さらには、現在自分の店を開くことになったアイデアは、ある明晰夢が元になっているそうだ。

メルヴィンが見知らぬ中国人から教わった明晰夢を見る方法は、チベットに伝わる「ドリームヨガ」の手法に似ているように思えた。メルヴィンからその方法のエッセンスを教えてもらい、何気なく昨夜の就寝前に実践してみたところ、今朝方の夢から覚める直前あたりに、夢の中で夢を見ていることに自覚的な自分が存在していた。本当にここ数年以内の話だが、夢の中で自覚的な意識を保つことが徐々にでき始めていることは興味深い。フローニンゲン:2019/3/6(水)07:41

3923. 解放と苦悩

私は毎日、自分の人生を新たにやり直している感覚がする。そのようなことを突然思った。日々を新たに生きるというのは、このやり直しの感覚を伴うものなのかもしれない。私はあえて、この感覚を「やり直し」と表現したが、もう少し適切なものがありそうな気がする。

とにかく毎日が、恐るべきほどに全く新しく始まる。表面的かつ外観的には、日々は全く変わらないように思えるかもしれない。だが、ひとたび日常の深層的な部分に意識を向けると、そこには驚くべきほどの目新しさで溢れていることがわかる。そして、そうした新しさは独特な輝きを放っている。

時に私は、そうした輝きに目がくらんでしまうことがある。今は徐々にではあるが、そうした輝きを伴う日々が常態化し、それを自然なものだとみなし始めることができている。もちろんそうしたことが可能になり始めているからといって、日常の新しさを蔑ろにしているわけでは決してない。むしろ全く逆であり、日常の新しさに気がつけば気がつくほど、それに対する畏怖の念が生まれる。

そうした畏怖の念に基づいて生きることが、もしかすると敬虔な生き方なのかもしれない。敬虔な生き方をするためには、この何気ない日常の深層に絶えず生起している新しさに気づく必要があるのではないか。そのようなことを思う。

昨日の日記の中で、人間の変容過程に伴う解放と苦悩に関する話題を取り上げていたように思う。昨夜も随分と一人で笑っていた。

おそらく笑いというのは、対象を客体化し、対象から適切な距離を置けた時に生まれるのだと思う。私が笑っていたのは、変容を遂げていく過程で得られる解放感と、どうしても無いほどの苦悩の双方が、絶えず自分の内側に存在していることに関してである。

この相反するものに対して笑いが生じたということを考えてみると、笑いが発生する条件としては、上述の通り、対象の客体化と対象との距離のみならず、実は対象そのものの性質としては、それが相矛盾するものを含んでいる必要があるのではないだろうか。

数日前に、日本人の知人の方の日記を拝読させていただいた時に、「私たちは楽になるために生かされているわけではない」という趣旨のことが書かれており、大変共感するものがあった。人間が生きることの本質には、楽になるという目的だけが存在しているわけでは決してないだろう。

上述の通り、生きることは確かに解放のプロセスではあるが、それだけでは片手落ちの生である。生きることは、解放を伴いながら楽になっていくという側面を持ちながらも、同時に苦悩が伴う。しかもその苦悩はひょっとすると、ある解放からもたらされたものであるかもしれないのだ。そのようなことを考えていると、今から半年ほど前か、あるいはそれ以上前に見た夢について突然思い出した。それは、ナチスの強制収容所に収容される夢だった。そこでの光景を今でも鮮明に覚えている。

中でもとりわけ印象的なのは、夢の最後に、収容所の全域にアナウンスが流れ、収容されている人たちが一斉に解放されたことだ。だが、私がそこで見たのは、解放されたことによって束の間の喜びを人々は味わいながらも、解放後にどうすればいいのかわからず、途方に暮れている姿だった。これは、解放に伴う苦悩の一つの形、ないしは原形だと言えないだろうか。このように私たちの人生は、絶えず解放と苦悩が入れ子状に伴うプロセスなのかもしれない。

人間の発達とは、様々な点において螺旋を描くように進んでいく。まさに、人生の発達過程は、解放と苦悩の二軸を行ったり来たりしながら進んでいくものなのかもしれない。そして忘れてはならないのは、一つのコインにおいて、解放とは苦悩の反対の面であり、苦悩とは解放の反対の面であるということだ。つまり、私たちは解放と苦悩の二つの対極的な軸を行ったり来たりしながらも、解放を感じている瞬間にも実はそこには苦悩があり、苦悩を感じている瞬間にも解放が存在しているということだ。

目の前の通りを、水しぶきを上げながら走る車の音が聞こえて来る。フローニンゲン:2019/3/6(水)
08:02

3924. 目覚めと真の教育

つい今しがた、一日分のコーヒーを入れ始めた。見ると缶に入っているコーヒーが随分と減っており、次回近所のスーパーに行った際には、新しいコーヒーを購入しておこうと思う。

先ほどまで、夢についての振り返りをしていたように思う。そういえば、昨夜の就寝前に、全ての人々が現実世界における夢から覚めるのは不可能なのだから、むしろ良い夢を見させたままにすることも大切なのではないか、ということを考えていた。このテーマは、先ほど日記に書き留めていた、解放と苦悩に関する話題とも繋がってくる。パリの旅行中に感じていたこととして、パリの街中を歩く人たちがことごとく夢の中で生きているということであった。

そこから私は、仮にこうした人々が現在の夢から目覚めてしまった時、途轍もない苦悩に苛まれるだろうと容易に想像できたのである。解放を謳うこと、目覚めることを謳うことは、世間においてよく見かけることではあるが、それは多分に偽善的なのではないかと思う。いや、それを謳う人たちは、心から解放と目覚めを促しているのかもしれないが、解放と目覚めに伴う苦悩については無知であるように思えてしまう。

一つの解放をもたらし、それに伴う苦悩をまた解放させる試みに従事すること、あるいは解放と苦悩の永続的なプロセスに継続的に寄り添うことができないのであれば、人々に解放と目覚めを促すのは純朴すぎる行為なのではないかと思えてくる。昨夜はそのようなことを考えていた。

それともう一つ昨夜考えていたことがある。それは、昨日の日記の中でも書き留めていたように、これまで無縁であったが強い関心を持っていた領域に関与していこうというものである。それがいかなる領域かについてはここでは取り上げないが、欧米での探究生活を通じて得られた知見を新しい領域に還元していくことに向けて前向きな自分がいる。

この夏からは、新しい生活地で生活を始めるのみならず、この世界から引き受けた自分の役割の発揮のされ方にも変化が見られるような予感がしている。役割そのものは以前と同じなのだが、その役割を果たす先がこれまでにはない領域である予感がする。

オランダでこれから長く生活をしていくのであるから、とりわけ関心を持っているオランダの教育については様々な角度から探究を進めていこうと思う。日常、その探究に割ける時間はもしかしたら少ないかもしれないが、絶えず関心を持っておこうと思う。

カント派の教育観として、「人間は教育を通じて人になる」というものがある。現在の我が国の教育は、果たして人間を人にする役割を果たしているだろうか。人間を機械や家畜にする方向に向かって教育が行われていないだろうか。

教育において最も重要なことは、人間を真の人に涵養していくことだと思うが、現代の教育の大半は、人間を機械や家畜に変えることに加担してしまっているのではないかと大いに懸念する。冒頭で取り上げていた話題と関連付けるのであれば、現代の教育は、ある種、一つの固定的な夢を押し付ける機能を担っているように思えてくる。そして、人々はそこで見せさせられた夢を一生涯にわたって見続けていくのである。もし人間を真の人に涵養していく真の教育が施されていれば、人は自らの力で夢から覚め、解放と苦悩の永続的なプロセスをたくましく歩いていくのではないだろうか。フーニンゲン:2019/3/6(水)08:25

No.1737: Be Yourself Anytime

It is still raining outside. This life tells me to be myself anytime. Groningen, 09:40, Thursday, 3/7/2019

時刻は午前11時を迎えた。これから昼食前に一曲ほど曲を作りたいと思う。

早朝の天気予報とは異なり、午前中においては小雨が降ることはなく、曇り空が広がっている。この様子であれば、午後に仮眠を取った後に散歩に出かけることができるかもしれないと思う。

数日前に、デン・ハーグの目星の物件に関して不動産屋に問い合わせの連絡をした。しかし、数日経ってもまだ連絡がなかったので、先ほど改めてメールを送った。もちろん会社や組織によりけりだが、顧客の対応が実にゆったりとしているというのもオランダの仕事の進め方なのかもしれない。

オランダでの四年目の生活が始まるまでまだしばらく時間があるが、四年目以降の滞在においては、起業家ビザを取得する必要がある。四年目以降においては、学術機関に所属するのではなく、以前と同様に、学術機関の外で研究と実務に従事していければと思う。

この二年間において、学術機関に所属しながら研究をしてきたが、そこでなされる研究に意味を見出しながらも、それ以上に意義を感じるのは、企業などの外部の組織と協働研究を行っていくことである。そうしたことから、四年目以降においては、人間発達に関する研究所を設立し、それを元にビザ申請をしようかと考えている。起業家ビザを取得するにあたり、移民局にビジネスプランを提出する必要がある。

特に私はこの研究所を大きくすることは考えていないが、ビザの申請の都合上、ビジネスプランなるものを立案する必要がある。研究所を設立して行う事業内容は、これまでと同様に、人間発達に関する研究とコンサルティング業務であるから、ビジネスプランの作成はそれほど難しいものではないだろう。

現在の滞在許可は今年の八月で切れる。起業家ビザに申し込むと、ビジネスプランの立案などに時間を割くための六ヶ月ほどの滞在許可がもらえるそうだ。とはいえ、八月の間近になってビザの申請に向けた準備をするのではなく、六月頃からその準備を着々と進めていきたいと思う。幸いにも、オランダには数人ほど起業家ビザを取得している日本人の知人がいるので、これからいろいろと話を伺ってみたいと思う。ビザの取得に関しては、弁護士を活用する方法もあるが、Search Year

の申請をすでに独力でやっていることもあり、今回もわざわざ弁護士を活用する必要はないだろうと思われる。

今日はこれから、昼食前に作曲実践を行う。先ほど、森有正先生の随筆文を読んでいると、大変興味深い記述に出くわした。それは以前読んでいた際にも印をつけていた箇所なのだが、改めて気づきをもたらしてくれるものであった。端的には、形を生み出すことは、実は自我の深い否定であるという指摘である。

発達には健全な自己否定が必要であり、自我は形を生み出しながら自己を否定していく性質を持っているのかもしれない。興味深いのは、自我は形を生み出しながら、それそのものを刻みだし、そして変容を遂げていくという点だ。形を生み出すというのは、自我の表現手段の一つでありながらも、それは自我が自らを否定することの表れであり、同時に自我を変容していくことでもあるのだ。そのようなことを思いながら、これから作曲実践に取り組む。フローニンゲン:2019/3/6(水)11:22

No.1738: From a Break in the Ominous Clouds

The sky is covered by ominous clouds. Yet, I can see a light from the break. Groningen, 14:44, Thursday, 3/7/2019

3926. 今朝方の夢

今朝は小雨が降り注いでいる。通りを走る車が水しぶきを上げているのが聞こえ、その音が止むと、小鳥の鳴き声が近くから聞こえてくる。

今日も静かな一日がやってきて、それが今ゆっくりと動き始めている。書斎の窓から外を眺めると、通りの街路樹に新緑の色合いを見て取ることができる。先々週までは春のような暖かさを持っていたフローニンゲンであるが、今週はまた冬に戻ってしまったかのような気温だ。春に向けて準備を始めていた生命たちは、ここでまたその準備をひと休憩させることになるだろう。

いつものように、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、実際に通っていた中学校にいた。私は、校庭で行なわれているリレー競技を観戦していた。見ると、競技に参加している人

たちは全員外国人であり、彼らの言葉に耳を傾けてみると、どうやらほぼ全員がアメリカ人のようだった。なぜか私はトラックの近くに歩み寄っていき、一つのチームの応援をそこですることになった。

リレーに出場している選手たちは、全員が大人であり、年齢は20代の前半から80歳近くの人までがいて、幅広い年齢の人たちが混合する形で一つのチームをなしていた。ちょうど私が応援しているチームの選手の一人が私のすぐそばにいて、これから走ろうとしていた。彼女はまだ20歳かそこらの風貌を持っており、なにやらアメリカ史上最も足の速い白人選手のようにも思えた。彼女の見た目はアスリートのようにではなく、どちらかという歌手か女優のような風貌であったため、私はその事実を意外に思っていた。

60歳ぐらいのアメリカ人男性の選手が彼女にバトンを渡し、彼女はそこから一気に加速した。確かに、アメリカ史上最も速いと言われることだけあって、その速度は極めて早かった。だが、走っている最中の表情を見る限りでは、思った走りができていないことが伝わってきた。それでもなんとか、次に待ち構えている70歳ぐらいの男性にバトンを渡した。

私は、走り終えた彼女に声をかけてみた。すると、やはり思った通りに走ることができなかつたらしく、悔しさを表す言葉をいくつか聞いた。そこで夢の場面が少し変わったが、私はまだ中学校にいたままであった。今度は、体育館で入学式があり、その後、オリエンテーションがあるようだった。

そこは確かに私が通っていた日本の中学校なのだが、そこではアメリカの大学の入学式が行われることになっていた。私はその大学に入学するわけではなかったため、入学式に参加することなく、校内をぶらぶらしていた。

すると、校舎の各教室では、オリエンテーションが終わった後に行われるクラブ活動の勧誘に向けて準備を着々と進めているようだった。私が二階のある教室の前を通りかかろうとした時、背の高いオランダ人の中年女性に声をかけられた。彼女は笑顔で、「合気道クラブに入りませんか？」と英語で私に話しかけてきた。久しぶりに合気道をするのもいいかもしれないと思ったが、合気道をする時間的な余裕が今の生活にはないと思ったため、彼女の申し出を丁重に断った。

そこから私は、階段を上って三階に行き、美術室を覗いてみようと思った。するとそこは薄暗く、人が誰もいなかった。窓に取り付けられた黒いカーテンはほぼ閉められており、少しばかり開いた隙

間から光が差し込んでいた。美術室に置かれている数台のパソコンにおもむろに近づいていくと、突然パソコンから音楽が流れ始めた。それはクラシック音楽のように思えたが、それが何の曲かはわからなかった。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/3/7(木)07:59

No.1739: Rainy Groningen

Everyday is the same as the transitional and transient weather. So our inner world and our life are. If so, this reality is truly transitional and transient. Groningen, 17:30, Thursday, 3/7/2019

3927. 生活への旅の流入:オランダでの生活について

早朝より降り続けている小雨を見ながら、パリ郊外の風景をふと思い出している自分がいた。パリの旅行から戻ってきて数日が経とうとしている。

パリの旅行を通じて、また一歩自分の人生が前に進み始めたのを感じる。それに合わせて、パリから戻ってきた今、自分の中の感覚の変容と、人生に対する意味づけの変容を見て取ることができる。このようにして私は、今後も欧州での生活を続けていくのだろう。この夏からアメリカでもスイスでもなく、オランダに残る選択肢を選んだことに伴って、欧州永住権を取得しようと思う。

仮にデン・ハーグに引っ越せば、そこから三年間か五年間は同じ場所で生活をするだろう。そこからのことは全くわからないが、もしかするとデン・ハーグに継続して留まり、市内で引越しをすることもあるかもしれないが、オランダで長く生活をしていくような予感がしている。

オランダに捕まってしまったというよりも、オランダに抱擁してもらっているという感覚が強くある。ここからオランダで長く生活をするにすることに伴って、欧州内でまだ訪れたことのない国や地域に積極的に旅に出かけていきたいと思う。

もちろん、仕事との兼ね合いもあるが、今の仕事をする上では自分がどこにいるかはさほど関係なく、旅先のホテルの中でも仕事を進めることは不可能ではない。これまで旅に出かける時は、基本的にオンラインミーティングなどが入っていない時期を選んでしたが、もしかすると今後は、そうしたミーティングが入っていたとしても旅に出かけていくことは十分可能なのではないかと思う。

欧州での生活が始まって以降、仕事と私生活の境目が溶解し、一つの落ちついた流れのような生活となった。そうしたことを考えると、これからは旅というものをそうした生活の溶かし込んでいくことも十分に可能なのではないかと思い始めている。オランダでの四年目の生活においては、このあたりのことを視野に入れながら、旅の非日常性を大切にしながらも、それを日々の生活の中にうまく融合させていく道を探ってみようと思う。

雨脚が少し強くなり、窓に付着する雨滴の量が増えた。

私はオランダにやってくる前は、フローニンゲン大学の一年間の修士課程を終えたらオランダを離れる計画を立てていた。しかしフローニンゲンでの生活、およびフローニンゲン大学で探究生活を始めてみると、この場所で学べることに豊かであることに気づき、もう一年残ることにした。

すると今度の二年目においても、同様のことを実感し、結局私はフローニンゲンで三年の時を過ごすことになった。もちろん、フローニンゲンでの生活の充実ぶりを考えると、この地に留まっていたいという気持ちが起こるが、同時に、新たな地で生活をする必要性を強く感じ始めているというのが実情だ。ただし、オランダという国が自分の感覚と適合しており、さらには自分の感覚を深く涵養することに寄与してくれていることを考えると、この国から離れることは賢明ではない。そうしたことから、アムステルダムやロッテルダムなどを調べながらも、結局自分が最も落ち着けそうなのはデン・ハーグであると直感的に思った。

昨日の昼食後に、アムステルダムに住む日本人の知人の方とオンラインで話をさせていただき、ちょうどその方はデン・ハーグに住んでいたこともあって、この街についてあれこれと話を聞いてみた。すると、流行や刺激を求めず、とにかく静かで落ち着いた生活環境を欲する私にとっては、アムステルダムよりもデン・ハーグが生活地に適していると改めて思った。

ちょうど私が目をつけていた物件の周辺は、とても落ち着いた環境であるそうなので、その物件に居住することが決まれば幸いである。今日あたりに、先日送ったメールに対して、不動産屋からの返信が届いていることを願う。フローニンゲン:2019/3/7(木)08:24

外は相変わらず雨が降っている。この人生が、「いかなる時も汝であれ」と語りかけているように思える。

ここ最近では再び天候が冬に逆戻りした。去年のこの時期に書いていた日記の通りの天候である。そうした変動の激しい天候にあって、自分の内側も少しばかり揺れが起こっているようだ。人間の発達において伴うのが、揺りかごの優しい揺れだけではないことは幾分残酷である。

またしても小さな揺れを経験せざるをえなくなった自己。そんな自己に同情したくなる気分であるし、慰めの言葉をかけてあげたい気分であるが、如何ともしがたい。そうした揺れの中を自己自らが歩んでもらうしか方法はなく、むしろ自己はそこに留まりながら、揺れの方が自発的にどこかに向かって動き出すのを待つしかないのかもしれないという気持ちになってくる。

新緑の色を見せはじめた街路樹が、雨風に揺られている。

パリに滞在している時に、郊外に出かけ、その時にぼんやりと考えていたことがある。それは、真の才能とは呪縛の証であり、真に自分の才能を発揮してこの世界で生きるというのは、そうした呪縛を引き受けることであり、それを宿命というのかもしれない、というものだった。

確かに私たち一人一人には固有の才能があり、それを育むことは大切だが、才能を発見し、それを発揮しながら生きるということの宿命性に踏み込んだ議論というものをほとんど見聞きしない。パリの旅行中に、国立ピカソ美術館、ラヴェル博物館、ドビュッシー博物館を訪れながら、こんなことを考えていた。「人とは違う自己の才能に気付き、それを最大限に発揮した人の中で、真に幸福な人生を送っていた人などいないのではないか」というものだ。

自分の中にある真の才能に気付き、それをこの世界で最大限に発揮することが、その個人の幸福につながるとは限らないこと、いや往々にして、その個人から幸福を奪いかねないことは実に皮肉なことではないだろうか。おそらく、真に自分の才能に目覚め、それを発揮しながらでも幸福感を得ることは可能である。そうであって欲しいと思う。

だが残念ながら、これまでの人類の歴史においては、そのような社会環境であったことはないであろうし、現代社会においてもそのような環境はないのではないかと感じてしまう。現代においては、才能というものが結局のところ、物質経済的なものに搾取されてしまい、才能を発揮することによって獲得されたように思える幸福というのは往々にして、そうした物質経済的なものにまみれてしまっている。そして、そうした見せかけの幸福感を感じれば感じるほど、それを増幅させればさせるほど、その個人の人生は破滅の道に向かっていく。そのような姿が見える。

私がフローニンゲン大学で最初の年に取得した修士号は、「タレントディベロップメントと創造性」に関するものであったが、才能を開花させることに伴う諸問題について何ら議論がされていなかったように思う。フローニンゲン大学の同プログラムは、当該分野において実に体系立ったカリキュラムを持っていたが、結局のところ、現代のいかなる大学機関も、この現代社会を覆う目には見えない巨大なイデオロギーに多大な影響を受けており、自分が真に大切だと思うことまで踏み込んで議論がなされることはほとんどないのではないかと考えてくる。私が学術機関にできるだけ所属しないようにしているのはそうした理由によるところが大きく、これからもその姿勢は基本的に変わらないだろう。

再び才能の話題について考えている。私の関心領域の観点でいえば、どうしても作曲家や画家の顔が思い浮かぶが、偉大な才能を持った人たちの大半が、激しい人生を送り、恵まれた環境に置かれていたわけでは決してなかったことについて考えてしまう。恵まれなかった環境の中で自己の才能を開花させ、才能が開花されたとしても、人生を幸福なものとして送れなかった過去の偉人たちの生き様を見ていると、この社会の中で才能を開花させることについて、どうしても慎重に考えざるをえない。

この現代社会においては、才能すらも商品化されてしまい、それによって多くの個人が悲劇的な人生を送ることを余儀なくされているように思う。このような社会の中で、いかにして私たちは自分の才能を開花させ、それを発揮していけばいいのだろうか。フローニンゲン:2019/3/7(木)10:13

No.1740: The Ancient Blue Sky

The clouds that I was seeing in the early morning were gone, and the sky became blue. How peaceful the view is! Groningen, 10:20, Friday, 3/8/2019

つい先ほど散歩から帰ってきた。今日は早朝に雨が降っており、午後からは晴れ間が見え始めた。晴れ間が顔を覗かせている時に散歩に出かけたのだが、途中から激しい天気雨が降ってきた。すぐさまスポーツウェアのフードをかぶって雨をしのぎながら散歩を続けた。しばらく歩いていると雨が止み、街の方を眺めると、そこに虹ができていた。久しぶりに虹を眺め、改めて自然の生み出すこの神秘的な現象について思いを馳せていた。

帰り際にもまた天気雨が降り始め、自宅に戻ってきた今は雨が止んでいる。最近は変動の激しい不安定な天気が続いている。

昨日にかかりつけの美容師のメルヴィンに髪を切ってもらったことについて日記に書き留めたいように思う。これからオランダで長く生活することに伴って、前々から気になっていたオランダの医療について話を聞いていた。

オランダでは、緊急の時以外は、基本的に病院を訪れても診察をしてもらえない。オランダはホームドクター制を採用しており、かかりつけの医者で紹介状がなければ大きな病院で診察や治療をしてもらうことができないことになっているようだ。最初私は、これは不便な制度だと思ったが、下手に病気をすることができないという、ほど良い緊張感が無意識的にもたらされ、またメルヴィンが述べるように、下手に薬に頼るよりも、たいていの病気を自然治癒で治していく力をつけていく上でも、自分にとってはそれほど悪くない制度のように思えた。

私たちの体は不確実性を絶えず持っており、いくら健康な生活を送っていても何が起こるかわからないというのが実情だろう。外から不可抗力的に侵入してくる病気に対してはどうしようも無いが、人間の病の要因のうち、最も重大なものであろう心理的な要因については、今の生活を継続することができていればそれほど心配は無いように思われる。オランダでの生活を通じて、人付き合いによる消耗は全くなく、人間関係がもたらすストレスが無いことは、心身が健康である現在の状態を生み出している最大の要因だと思う。

オランダの医療について話をした後に、メルヴィンの店の開店を記念して贈呈した品について話が移った。その品は、飛鳥時代に起源を持つものであり、メルヴィンから飛鳥時代について尋ねられ

た。それが日本の歴史上、どのような意味を持つ時代だったのか、当時の首都はどこにあったのかなどについて質問を受けた。昔学んだ日本史の知識を引っ張り出しながら、メルヴィンの質問に答え、後ほどその回答に誤りがないかを確認したところ、基礎的な情報に誤りはなかった。次回メルヴィンに髪を切ってもらう際には、今度は別の観点でオランダについて話を聞いてみたいと思う。

雨雲とそうではない雲が混じった形で空に浮かんでいる。遠くの空には青空が広がっていて、今また通り雨が降り始めた。

この現実世界の中を生きていくに際して、未来は本当にわからないものなのだと改めて思う。何か未来に望みを持つというのは、もしかすると、現在の生をあるがままに受け入れることができず、それを間接的に否定していることの表れなのではないかと思ってしまう。

私たちは、常に未来に対して何かしらの望みを持ちたがるが、そうした衝動を手放し、真に今に生きることができればより心穏やかな日々を送ることができるのではないかと思う。そして仮に、何か不本意なことが現実起こったとしても、それが私たちの人生を深めてくれることは十分に考えられる。

不本意な現実というのも、もしかすると、私たちが今という瞬間を肯定することができず、未来に生きようとすることから生まれてくるのかもしれない。今すぐに未来に生きることが難しければ、それを徐々に手放していけばいい。その過程において、不本意な現実を幾度となく突きつけられるだろうが、それは私たちの変容を招き得るのだ。再び雨が止み、夕日を眺めながらそのようなことを考える。フ
ローニンゲン:2019/3/7(木)16:55

No.1741: Eternal Geniality

It is approaching 3PM. I'll read Kafu Nagai's diaries and then go for a walk. Groningen, 14:53,
Friday, 3/8/2019

3930. 今朝方の夢

最近随分と日が昇るのが早くなった。今朝、六時半頃に目覚めた時には、すでに外が明るくなっていた。

日照時間においては、ようやく暗い冬が終わりに向かっていることがわかる。あとは気温に関しても、これから少しずつ春に向かっていってくれればと思う。

今朝方の夢についてまずは振り返っておきたい。夢の中で私は、欧州の見知らぬ街にいた。そこは都市と自然が調和しているような街であり、私は街の中心近くにある建物の中にいた。建物の中で、一人の見知らぬ日本人女性と出会い、その場で少し立ち話をしていた。すると、その女性の背後に人の気配がした。

見ると、彼女には外国人のボディガードが付いているようだった。彼女は小さな声で、ボディガードの存在が鬱陶しいということを私に伝えた。「それでは、ボディガードを振り切って逃げましょう」と私が提案すると、彼女は笑みを浮かべながら頷いた。私たちはボディガードを振り切るようにして、すっと走り出した。

目の前の階段を上り、次々と上の階に駆け上がっていき、随分と上の階のフロアに到着した。後ろを振り返ると、ボディガードはどうやらまだ階段を上がっている最中のようなようだった。そのため、私たちは、一旦どこかの部屋に身をひそめることにした。その階にはいくつか会議室のような部屋があり、そのうちの一つに入った。

しばらく経ってもボディガードがやってこなかったため、安心してると、ボディガードが部屋のドアを開けた。ボディガードは相変わらず無表情であり、何一つとして言葉を発しない。それは幾分気味が悪く、私は魔法を使って、そのボディガードを小さな箱に閉じ込めた。小さなダンボールのような箱に入ったボディガードは、激しくはないが、小さく抵抗しており、箱の中で動いている。

私は箱を持ったまま窓際に行き、窓から箱を投げ捨てた。すると、その箱は急激に地面に落下するのではなく、ひらひらと舞う紙吹雪のように、ゆらゆらしながら地面に落ちていった。その姿を眺めていると、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は高校時代の友人(TS)と寮のような場所で話をしていた。彼はサッカー一部に所属しており、ちょうど練習を終えた後のようだった。部屋でくつろいでいる彼に、私は自分の足の裏を見てもらおうことにした。ちょうど土踏まずの部分の皮膚が白く硬くなってしまっており、それはおかしいことではないかはその友人に確認したかったのである。

早速彼に自分の足を見せると、彼は、「自分の足の裏の方がもっとひどい」と述べ、足の裏を見せてくれた。すると、土踏まずの部分だけではなく、足の裏全体に、皮膚が固まった白い跡が見えた。正直なところ、それを見たときには私はちょっとギョッとしてしまった。少しばかり気持ち悪さを覚えたため、私は彼にお礼を述べて、その場から去り、別の友人のところに向かった。

次に向かったのは、小中高時代の親友(NK)のところである。先ほどの友人の寮の部屋とは違い、そこはその親友の自宅の一室のようだった。ちょうど親友は目覚めたところだったようだが、私は起床早々に、彼に足の裏を見せてもらうことにした。すると、彼もサッカー部に所属していたのだが、先ほどの友人とは異なり、足の裏がとても綺麗だった。

血の巡りが良い印なのか、足の裏全体の色もとても良かった。足の裏の話はそこで終わりにすると、彼の方から、今度何か街で出し物をしようと計画していると話を持ちかけてきた。その計画について話を聞いてみると、何やら街の大きな公園の芝生の上で、ロックコンサートを行うとのことであった。今からちょうどコンサートに向けた練習があるとのことなので、私たちは彼の自宅を後にし、スタジオに向かった。

そのスタジオは、私が大学時代に住んでいた街の駅前と雰囲気が似た場所にあり、銀行の横の一つのビルの中に入っていた。私たちがスタジオに到着すると、演奏者の数名が続々とやってきた。私は彼を手伝うために、スタジオの使用料や演奏者への出演料の計算をすることにした。今回は市民の方々に演奏を楽しんでもらうことを一番としており、こちら側で収益を得ることを目的にしていなかったことだったので、とりあえず演奏者への出演料を手厚くし、スタジオの使用料などの費用分さえ確保できていればいいとのことであった。

そこで夢の場面が変わり、コンサートの当日を迎えた。コンサートの開始は、昼食後とのことであった。コンサート会場の公園に到着してみると、会場設定はすでに完了しており、あとはコンサートを始めるだけとなった。すると、先ほどまでは晴天だったのだが、突然天気雨が降り始めた。

すでに会場で待っていた人々の多くは、雨を避けるためにその場を離れ、雨宿りできる場所に移動していった。私たちは、そのまま観客が去ってしまうのではないかと懸念し、会場アナウンスで雨は

すぐに止むということを伝えた。すると幸いにも、すぐに雨は止み、いよいよコンサートが始まる瞬間を迎えようとしたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/3/8(金)08:19

3931. 夢の振り返り:絶え間ない変化の中で

時刻は午前八時半を迎えた。今日は幸いにも晴れとのことであるが、今この瞬間は、薄い雲が空全体を覆っている。太陽の姿を拝むのは、もう少し後になってからになるだろうか。

昨日は幾分風が強かったが、今日はそうではない。確かに少し風はあるが、それほどの強さではないため、午後の散歩の最中に何か困ることはないだろう。

先ほど、今朝方の夢について振り返っていた。一連の夢の途中で、高校時代の別の友人が現れ、彼の名字の最後の文字を間違えてしまい、違う名前と呼んでしまったことが記憶に残っている。彼は嫌な顔をしておらず、私が冗談でそれを述べていると思っているようだった。その他に覚えていることとしては、小中学校時代の女性の友人(AS)と中学校の靴箱で会い、そこで話をしていたのを覚えている。彼女は、私よりも走り幅跳びの記録が良く、ちょうど数日後に陸上大会に出場するとのことであった。彼女に激励の言葉を述べた場面があったことを覚えている。

今朝方の夢について改めて振り返ってみると、最初の夢の中で出てきた、どこまでも後をつけてくるボディガードは何を象徴しているものだったのだろうか。確かに、あのボディガードは、私のボディガードではなく、見知らぬ女性のボディガードであったが、自分の何かしらのシャドーの表れであると言えなくもない。

もちろん、見知らぬ女性そのものも、おそらく自分の何かしらのシャドーの表れだと思うのだが、直感的に、重要なシャドーはボディガードの方にありそうだ。先ほど夢について描写している中で、ボディガードは常に無表情であったと述べていたが、実際にはどのような顔をしていたかを覚えていないのみならず、姿もどのようなものであったかも覚えていない。というよりも、人間の輪郭だけを見ていたような感覚がするのである。そして、そのボディガードを小さなダンボールのような箱に詰め、窓の外に投げ捨てた行為は何を意味しているのだろうか。それはシャドーとの決別を表しているのだろうか。だがそれが仮に、シャドーを自分から切り離すことになってしまっていたのであれば問題だろう。シャドーを客体化するところまではうまくいき、あの時に私に求められていたのは、シャドーと

の対話だったのかもしれない。それを通じて、シャドーを健全な形で自己に再所有することが大切だったように思えてくる。

この日記を書き始めてまだ数分ほどしか経っていないが、その間に、空が晴れてきた。ここ最近、本当に激しく変動する天候が続いている。気温の変動もそうであるし、晴れと雨の変動もそうだ。

昨日にふと、日々は移り変わる天気のように、私たちの内面世界も人生もまたそうである、ということを考えていた。そこから、このリアリティの移り変わりやすい性質について思いを馳せていた。

日々刻一刻と様々なものが変化していく。自分の内側においても、外側においても、その変化は激しく、絶え間ない。そんな絶え間ない変化の中に身を置いているのが自己であるし、自己そのものが絶えず変化しているのを実感する。

この夏から、私はオランダでの四年目の生活を始める。四年目の生活においても、絶え間ない変化の中で、絶え間ない変化を経験することになるだろう。フローニンゲン:2019/3/8(金)08:43

3932. 欧州での四年目の生活に向けて

早朝の作曲実践を始める前に、もう一つだけ日記を書き留めておこうと思う。明日の昼に、現在デン・ハーグに住んでいる友人とランチを共にする予定が入っており、その際にはデン・ハーグの話や起業家ビザの申請などについて色々と話を伺おうと思う。

今日は、協働プロジェクト関係のオンラインミーティングなどが特にないため、探究活動と創造活動に多くの時間を充てていこうと思う。ちょうど昨日から、永井荷風の日記(『荷風全集第四巻』)を読み始めており、今日中に一冊分の日記を読み終えることができるだろう。

欧州での四年目の生活が今年の夏から始まる。欧州の地で、引き続き自己を異質の世界の中に投げ入れていくことになりそうだ。そうした経験が増せば増すほどに、自己は異質な世界との接触を通じて磨かれ、結晶化されていくだろう。自己が開かれながらにして深まっていく様子を見て取ることができる。おそらく、私が欧州の地に残ることになったのは、落ち着きのある環境でありながらにして

異質な環境の中で生活をすることによって、自己を深めていくためなのだろう。こうしたことも一つの宿命的なものとして受け止めたい。

つい先日までは、アメリカかスイスで生活を始めることになれば、この夏は北海道で一、二ヶ月過ごすことを考えていたことが懐かしく思える。そうしたことを考えていた時からそれほど時間が経っていないことを考えると、そこからの変化は実に大きなものであることがわかる。

日本の大都市で生活をするには抵抗があったが、札幌であればそうした抵抗感はそれほどなく、むしろそこでの生活を楽みにしている自分がいたように思う。一方で、数ヶ月前までの私は、アメリカやスイスでの生活に向けて諸々の準備をしていたが、最近になって、果たして自分は再びアメリカに行く必要があるのか、スイスに行く必要があるのか、ということを見問するようになっていた。

確かに国を変える引っ越しそのものが面倒であり、仮にビザを申請するために日本に戻るのであれば、日本に半分の荷物を送り、もう半分を新たな生活地に送る必要があり、かなり手間がかかる作業だと思っていた。

スイスのドルナッハにある、精神自由科学大学にて、シュタイナーの思想を一年かけてゆつくりと学ぶプログラムの費用は、わずか35万円ほどであり、ドルナッハでの生活費を含めても、300万円あれば十分であった。一方、仮にHGSEの芸術教育プログラムに所属することになった場合には年間の授業料が500万円ほどであり、そこに生活費や保険料などを含めると、900万円ぐらいの資金を投じる必要があった。

この八年間において、気がつかないうちに、私は自分の教育に対してかなりの資金を投じており、もはや自分の教育に対して熱を上げるようなところにはいないのではないかと思い始めていた。そのようなことを考えていると、結果としてアメリカとスイスへ行く話は流れた。

四つ目の修士号を取得するようなことはもはやないだろうが——少なくともここから数年の間においては——、いつかドルナッハでは学びを得たいと思う。それは今から5年後、10年後、あるいはさらに先のこともかもしれない。いずれにせよ、この夏からは、オランダでの三年目と同じように、あるいはそれ以上に落ち着いた生活環境の中で、自分のライフワークを前に進めていこうと思う。ただし、三年目と四年目で違うことがあるとすれば、仮にデン・ハーグに引っ越したのであれば、コミュニティー

を大切にし、外で人と会って話をする機会が増えるだろうということだ。フローニンゲン:2019/3/8
(金)09:23

No.1742: On a Serene Morning

Although this morning is serene, I have something to think about. Groningen, 09:27, Saturday,
3/9/2019

3933. 永井荷風の日記:欧州生活四年目のあり方

今日も緩やかに時間が流れ、気がつけば午後の五時を迎えた。先ほどまで近所の河川敷のサイクリングロードを散歩していた。雨の日以外は、毎日散歩兼軽いランニングに出かけることが習慣となった。こうした全身運動は身体の血流を良くし、それが心身のエネルギー循環にも肯定的な作用を及ぼしていることを実感する。

今日は、午前と午後の時間を使って、永井荷風の日記を読んだ。主には、永井がアメリカとフランスで生活をしている時に書かれたものである。1900年の前半に書かれたものであるため、現代の日本語とは異なる文体で書かれており、最初は読みにくさを感じていたが、途中からそうした感覚は無くなっていった。

実は、この日記は随分と前に初読を始めていたのだが、途中で読むのをやめてしまったという背景がある。その時には、永井の日記はどこか淡々とした情景描写の類が多く、永井本人の実存的な事柄が文章から感じられなかったように記憶している。しかし、改めて先日日記を紐解いてみると、確かに外的現象に対する記述は多いが、その中でも永井の実存性が込められていることが見えてきたのである。ひとたびそれに気づくと、永井の日記の中に面白さを見出し、今日の午後に初読を終えた。

この読書体験から改めて、著者の実存性が滲み出さないような文章を読むことは、必要に迫られていない限り極力控えていこうと思った。一般的に科学的な専門書は、「客観的」という名の下に、著者の実存性を隠蔽するようなものが多いが、そうしたものは確かに表面的な知識を私たちに授けてくれるが、私たちが真に深めてくれることには繋がらない。哲学的な書物に関しても同じであり、基

本的に哲学書には著者の実存性から滲み出る思想を期待するのだが、そうではなく、単に他の哲学者の思想を表面的に辿るだけの書籍が多いことは残念だ。明日以降は、『荷風全集第五巻』を読み進めていきたい。

今日は、早朝に見えていた雲が午前中には消え、青空が広がり始めた。そこで見た穏やかな景色が忘れられない。先ほどの散歩の最中は、優しい夕日が辺りを包んでいた。

この一、二週間の中に、この夏からの生活に関して二転三転あったが、オランダで継続して生活できることをとても肯定的に受け止めている。そもそもこの地で永住権を取得しようと思っていたほどなのだから、そのように受け止めるのも当然といえば当然だ。

直近の欧州での三年間を振り返ってみると、特にフローニンゲン大学に在籍していた二年間は、科学研究に関するインプットとアウトプットに多くの時間とエネルギーを充てていたように思う。それはそれで、非常に良い経験になったことは間違いないが、欧州で継続して生活をするこれからは、これまでの学びをさらに深めていくことに時間とエネルギーを充てていきたい。

確かに、これからも新たな書物や論文に目を通していこうだが、基本的なスタンスとしては、過去数年に読んだ専門書と論文を繰り返し読み返すことを行っていきたい。また、この三年間の生活スタイルの都合上、小説などを含め、未読の書籍や一読しかしていない書籍が本棚に数多くあるため、今年から時間をかけて、それらをゆっくりと読み進めていきたい。端的には、欧州での四年目の生活以降しばらくは、これまでの学びを深化させていく時間としたい。実践領域に関しては少し拡張する必要性を感じているため、探究とのバランスで言えばちょうど良いだろう。

これまでの探究活動を通じて得られた知見を新しい領域に活用していく実務を始めるとともに、学びに関してはこれまで学んだものをさらに一段深くしていくことを意識していきたいと思う。フローニンゲン:2019/3/8(金)17:13

No.1743: The Frozen Reality

I perceive this reality to be dynamic and frozen. Groningen, 11:08, Saturday, 3/9/2019

3934. 音楽宇宙の長期的拡張に向けて：これからの協働について

時刻は午後の八時に向かいつつある。本日最後の日記を書き留めた後に、協働プロジェクト関係の資料に目を通し、その後、作曲実践を行いたい。夕方に散歩をしている最中に、作曲に関しては本当に長期的な展望を持って取り組んでいきたいという気持ちを新たにしたい。継続的かつ長期的に作曲技術を発達させていくためには、毎回の作曲実践において絶えず新たなことを試し、新たな発見をしていくという意識が求められる。

毎回の日記に必ず新たな気づきと発見があるように、作曲実践を通じてそうした気づきと発見を絶えず得ていくようにする。そのためには作曲における観点を獲得していくことが重要であり、毎回の実践ではそうした観点をを用いて曲を作っていくことが大切になるだろう。

毎回新たな気持ちを持って新しいことを試すのであるから、その瞬間の創造活動の質は低くなってしまいかもしれないが、そうであっても何ら問題は無い。ピカソが、「毎回の絵画制作は新たな実験であり、生涯実験を続けていく」と述べていたように、絶え間ない実験を毎回の作曲実践で行っていく。そうしたことを継続していけば、徐々に自分の中の音楽宇宙が開拓されていくだろう。

夕食を摂っている最中に、オランダでの四年目の生活においては、多様な領域での協働を実現させていきたいと考えていた。これまでの私は、どうしても企業社会における協働が中心になっていたが、人間発達に関する科学的な知見と哲学的な枠組みは、何も企業社会に寄与していくためだけにあるのではないことに気づかされる。

これまでの自分の関与領域を押し広げることを、欧州での四年目の生活から始めていく。もちろん、引き続き企業社会における協働に従事しながらも、スポーツの領域における協働、芸術の領域における協働、教育の領域における協働など、様々な領域の関係者の方々と協働をしながら、ある領域で得られた知見を他の領域に還元し、複数の領域を横断していくような円環的な関与をしていく。おそらくそれが今の自分に託されていることであり、そうした役割を積極的に引き受けようという気持ちになっている。

欧州の最初の三年間においては、あえて自己を少数の領域に閉じる形で仕事を進めてきた。だが今は、そうしたフェーズが終わりを迎え、自己を多用な領域に開いていくフェーズに差し掛かっていると強く実感する。既存のフェーズが終わりを迎えるに伴って、そこにいた自己もまた一つの役割としての発達段階から脱却し、次の段階に向かっている。先日まで自分の内側で知覚されていた自我の抵抗は、まさに自我の死に対するものだったのだろう。

自我の最後の抵抗が落ち着き、新たな自我が誕生しようとしている。そしてその自我は、これまでの自我よりも一段透明なものになっているように知覚される。

欧州での四年目の生活では、この新たに誕生した自我を持って日々を生きていくことになるだろう。そしてそれは、多様な領域の関係者の方たちとの協働を通じて、ますます透明になっていき、唯一固有の自己としての純度を高めていくことになるだろう。私は欧州でそのようにこれからも生きていく。
フローニンゲン:2019/3/8(金)20:04

3935. 早朝に思う今後の旅先

パリ旅行から戻ってきての最初の土曜日が始まった。時刻は午前七時半を迎えようとしており、青空の中をちぎれ雲が比較的早い速度で動いている。

今日は、デン・ハーグに住む友人がフローニンゲンまで来てくれることになっており、ランチを共にし、夕方までカフェで話をする計画になっている。デン・ハーグでの生活や起業家ビザの申請などについて色々と話を聞きたいと思う。

欧州での四年目の生活では、以前の記事で書き留めたように、オランダを起点にして、まだ訪れていない国や地域に旅行に出かけたい。これから長くオランダで生活をしていこうと考えているため、四年目に旅行を詰め込む必要は全くない。その時の自分が求める場所にぶらりと足を運ぶようなスタンスで、気ままな旅を楽しみたいと思う。いくつか関心のある国や地域を列挙してみると、西ヨーロッパにおいては、スペイン、ポルトガル、イタリアに足を運び、幾つか代表的な美術館を巡ってみたい。その他のヨーロッパ地域における国としては、ギリシャ、トルコ、グルジア、そしてロシアに足を運んでみたいと思う。今、書斎にはスクリャービンのピアノ曲が流れており、モスクワにあるスクリャービン博物館と、モスクワ郊外にあるチャイコフスキー博物館には是非いつか訪れてみたいと思う。

アフリカ諸国に関しては、エジプトとモロッコにまずは足を伸ばしてみようかと考えている。改めて地球儀を眺めると、地球というのは小さいようでいて大きく、まだまだ訪れたことのない場所が数多くあり、その中には私の関心を引く場所が多々あることに気づかされる。

昨日、メールを確認していた際に、ベートーヴェンが生まれたドイツの街ボンに関する旅案内を見つけた。2020年は、ベートーヴェンが生誕してから250年を記念する年のようであり、来年の一月の中旬から二月の初旬まで、ボンではベートーヴェン週間が開催され、街をあげて祝うイベントが行われるようである。もちろん、その時期のボンは混むことが予想されるが、デン・ハーグからボンまでは、列車で三時間半ほどの距離なので、それほど遠くなく、その時期にボンを訪れてみてもいいかもしれない。

今日は朝から今後の旅についてつらつらと書き留めていた。先日までパリに旅行をしていたが、今後の旅行では、できるだけ街の中心部ではなく、自然を感じられる落ちついた場所に宿泊したいと思う。仮に街の中心部に滞在せざるをえなかったとしても、喧騒とした場所は避けるようにしたい。

今後の旅においては、美術館を訪れることがメインになり、標準化された都市部を見ていてもその地域の真の生活風景はわからないであろうから、郊外の街を散歩するようなことをして、その国や地域の生活の様子を少しでも感じる事ができればと思う。それと、欧州での四年目以降の生活では、ぜひともオーロラ観測クルーズに乗ってみたいと思う。結局今年の冬は色々なことが重なり、それを実現させることができなかった。オーロラ観測クルーズを含め、欧州において実現させたいと思う旅がいくつもある。フローニンゲン:2019/3/9(土)07:46

3936. 今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前八時に向かっている。フローニンゲンの街は、今日もまたとても穏やかな雰囲気を出している。先ほどまで見えていたちぎれ雲はどこかに行き、今は青空が広がっている。天気予報を見ると、昼食の前後で雨が降るようなのだが、この空を見ている限りだと、それを信じる事ができない。とはいえ、友人とのランチに向けて出かけていく際には、折りたたみ傘を持っていきたいと思う。

今日はまだ今朝方の夢について振り返っていなかったのので、少しばかり夢の振り返りを行っておきたい。夢の中で私は、駅のプラットホームにいた。厳密には、駅構内からプラットホームに向かうところから夢が始まった。

列車の到着時刻まであまり時間がなかったのので、私はプラットホームにつながる階段を急いで上った。駆け足でプラットホームに向かったことが功を奏してか、列車はまだ到着しておらず、プラットホームに自分が到着して二、三分後に列車がやってきた。

列車がゆっくりとプラットホームに到着し、ドアが開いた。そこで私はなぜだか列車に乗るのを躊躇してしまった。何か忘れ物をしたのか、それとも駅構内で購入しておくべきものがあったのか定かではないが、とにかく、列車に乗ることを躊躇われる要因があった。もしかすると、そうした個人的な要因以外にも、誰かを待って、その人と一緒に列車に乗る必要があったのかもしれない。

いずれにせよ、そうした躊躇があったせいで、列車の扉が閉まってしまった。しかし私はそこで再び躊躇を振り切り、列車に乗ることが最も賢明なことのように思ったので、緊急時にドアを開けることができる赤いボタンが、なぜか列車の外側に取り付けられていたので、私はそれを押した。

列車はもう出発しようとしていたところだが、幸いにもドアが開き、私は列車に飛び乗ることができた。そこは四号車であり、大して混んでおらず、そこで席を確保することは容易であったが、私は三号車の方に向かって歩き出した。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、実際に通っていた中学校の体育館にいた。時刻は昼あたりであり、昼の優しい太陽光が体育館に差し込んでいた。

体育館に設置されている四つの扉はすべて空いており、風が通るようになっていた。体育館にはバスケット部の同学年のメンバーがほぼ全員いて、今からバスケの練習をしようと思っていた矢先、部活の顧問ではない先生が体育館に入ってきた。どのようなわけかわからなかったが、先生は私たちを整列させ、なにやら話を始めた。私たちは説教を食らうかと思ったが、ちょっとした雑談のような話を先生はして、すぐに体育館から消えた。私のみならず、他のメンバーも、なぜ先生が体育館にやってきたのか定かではなく、全員が不思議そうな顔を浮かべていた。そこから私たちは気を取り直して練習を開始しようとした。

すると、メンバーの一人、かつ小中高と長い付き合いのある友人(YU)が私の方に近づいてきて、足のツボをマッサージしてくれるという。マッサージを通じて、体に異変がある場所を特定してくれるとのことだったので、私は彼にマッサージを依頼した。彼はすぐさま、左足をマッサージする必要はないと判断したようであり、私の右足の足の裏のツボをマッサージし始めた。足の裏に関しては特に痛みを覚える場所はなかったが、右足の中指か小指のところに痛みを若干感じた。

その痛みを通じて、身体のどこに異常があるのかを彼は教えてくれた。マッサージが終わり、いざ練習を始めようとする、今度は同じくメンバーの一人、かつ小中学校時代の別の友人(KM)が、巨大な計量カップに入った牛乳を私に持ってきてくれた。彼はココアか何かが入った茶色をした牛乳を飲んでおり、私に手渡したのは普通の白い牛乳だった。幾分喉が渇いていたこともあり、私はそれを有り難く受け取り、牛乳を飲もうとしたところで夢から覚めた。

今朝はそのような夢を見ていた。実際には、各場面において、もう少し細かな情景描写があり、そこで喚起される固有の思考や感覚があったように思う。ただし、それらについてはもう忘れてしまっている。とりあえず、夢の中で現れた主要なシンボルについて書き留めることはできたと思う。朝の時間においては、もう少し夢の内容を思い出すように意識してみようと思う。フローニンゲン:2019/3/9 (土)08:17

3937. 友人との対話より

つい先ほど夕食を摂り終えた。一時間半ほど前までフローニンゲンの街の中心部に外出をしており、今ゆっくりと日記を書き留める時間が生まれた。

今日は正午より、デン・ハーグに住んでいる友人とランチを共にし、その後、六時半過ぎまで話をしていた。久しぶりにこのように長く会話を楽しんだように思う。ランチの最中の会話、そしてカフェでの会話を含め、今日はその方から多くの気づきを得、多くのことを学ばせてもらったように思う。正直なところ、先日のパリ旅行の際に得られた気づきや発見以上のものがあったように思う。それらは多岐に渡っており、今全てを書き留めることはできない。明日以降の生活の中で、徐々に今日の気づきと発見を咀嚼していき、その過程で得られたものを文章として書き留めていきたいと思う。

仮に今この瞬間に書き留めておきたいと思うものを選定するのであれば、それは間(あわい)の話になるだろうか。間とは、文字どおり、何かと何かのあいだの空間のことを指す。

私たちが今日取り上げていたのは、言葉や芸術作品を含め、形と呼ばれるものはこの間から生み出されるのではないかというものだった。いや、それは多分に私の解釈かもしれない。しかし、友人の方も同じような認識を持って話を進めていたように思う。

この話題を自分に引きつけて考えてみると、自分の場合においては、言葉や音楽がいかように生まれるかを考えてみたときに、それは確かに自分の内側から生まれるという側面もあるのだが、実はそれらは純粋に自分の内側から生まれているのではなく、間から生まれていると言えるのではないかと考えていた。

それでは自分と何との間なのかというと、端的には自分を取り巻く事物の全て、とりわけ自己が身を置いている環境との間だと言えるように思う。以前からの実験として見えてきていたのは、自分の生み出す言葉や音楽の質感が、自分がどのような環境にいるのかによって変化するということであった。まさに直近の例で言えば、パリに旅行している最中の自分の言葉と音楽と、フローニンゲンで生活をしている時の言葉と音楽には質的な差があるということであった。その差そのものの優劣はつけられないのだが、明らかに差があるということを歴然と実感している自分がいた。

ここから私は、言葉や音楽を含めた創造物は、自分と自己を取り巻く環境との間から生まれるのだと考えるようになっていく。このテーマは、自己の内側から何か形を生み出すことに関連しているのみならず、そもそも言葉を司る人間の精神生活および発達と密接に関係していることが見えてくる。

私たちは、絶えず自らの言葉を彫琢していく形で知性および精神を育んでいくという特徴を持っており、言葉そのものが自己を取り巻く関係性の産物であることを考えると、環境そのもののみならず、環境との関係の結び方に言葉の発達、さらには精神や知性の発達のカギがありそうだということが見えてくる。

自己と環境との関係性、自己が生み出す創造物と環境との関係性については、これからも考えを深めていきたい主題のひとつである。今この瞬間に書き綴っている自分の言葉も、今この瞬間の自己と取り巻く世界との関係性から生まれているものなのだろう。フローニンゲン:2019/3/9(土)20:29

時刻は午後八時半を迎えようとしている。今日の早朝は青空が広がっていたが、昼食前に雲が始め、風がとても強かった。

友人とランチを摂り終え、近くのカフェに到着してしばらくすると、風を伴う雨が降り始めた。しかし幸いにも、閉店までいたカフェを出るときには雨がすっかりやんでいた。また、今日は体感温度がとても低く、冬に逆戻りしたかのような一日でもあった。

実は、先日のパリ旅行の際に書き留めていたメモをまだ全て文章にすることができておらず、それは随分と溜まったままである。見方を変えれば、それは今寝かせている状態と言えなくもないが、近いうちにそれらについて文章を書き留めておきたいと思う。その一方で、今日の友人との対話から考えさせられた論点が多岐にわたっており、それらの多くについてはしばらく寝かせることになるかもしれない。

その友人の方は、生け花、お茶、書道などを嗜んでおり、それらの話から得られる気づきや発見が非常に豊かであった。まさに、自分が日々行っている作曲実践と相通じるものが多々あり、逆に新しい観点に気づかせてもらったことも多々あった。

音楽に伴う時間と空間のテーマについては以前より関心を持っており、ぼんやりと考えることがあったが、今日の対話を通じて、いくつかまた気づきがあった。確かに作曲をしている最中は、楽譜という平面のものと向き合うことになるのだが、音楽というのは時間と切っても切れない関係になっているため、楽譜と向き合っている瞬間でさえも、それは二次元空間での実践ではなく、時間も含めた実践となる。さらには、音に奥行きがあるように、曲を作る最中においては、ハーモニーの観点などから、必然的に三次元的な形で音を生み出していくような発想をこれまで無意識に持っていたことに気づかされた。また、興味深いのは、一つ一つの曲には固有の時間と空間が宿っているということである。以前より、一つの曲には一つの命があるように感じられつつあったのだが、その明確な理由を掴んだように思う。そうした生命感を生み出す重要な要素として、その曲に固有の時間と空間を挙げることができるだろう。

そこから色々な話題に飛び移っていったが、「生け花の領域で卓越した人が作る作品と、そうではない素人が作る作品には決定的に何が違うのか？」という質問を私が友人の方に投げかけた時、その方の回答は上記の話題と密接に関係していた。

端的には、卓越した人の作品には、空間の奥行きがあるとのことであつた。そこから対話を進めていくと、より厳密には、作品から汲み取ることのできる時間的かつ空間的な奥行きが決定的に深いとのことであり、それは作品に込められた意味の奥行きと言い換えることもできるだろう。これは他の芸術作品にも多分に当てはまるように思う。例えば、なぜ音楽の傑作が、何十年、あるいは数百年にもわたって聴き続けられているのかというのも、そこに一つのヒントがありそうだ。

もちろん、その曲を聴き続ける社会的な条件付けなどの要因も考えられるが、一つ重要なものとしては、その作品が持つ時空間の豊かさ及び意味の豊かさを挙げることができるだろう。その作品にそうした豊かさがあるため、私たちは飽きることもなくその作品を繰り返し聴き、そして繰り返し聴くたびに新たな発見があるのだと思う。

そして、そうした創造物を生み出すにはどのようなことが必要かという点についても話題となり、それは先ほどの日記の中で書き留めたように、自己と自己を取り巻く環境との関係性をいかように結んでいくのかと共に、表現者自身の感性・感覚の深さが求められることは間違い無いだろう。音楽のみならず、それを芸術一般に拡張する形で、引き続き時空間と芸術との関係について考えていきたいと思う。フローニンゲン:2019/3/9(土)20:48

No.1744: A Song for Wandering Souls

The outside world has a quiet atmosphere that looks as if it healed wandering souls. Groningen, 10:35, Sunday, 3/10/2019

3939. デン・ハーグとの縁および客死について

そもそも今日話をしていた友人の方とは、振り返ってみると、今から五年前に東京に一年ほど生活をしていて時に知り合ったのだということをふと思い出した。その後、その方は福岡とドイツのフランクフルトを経由してデン・ハーグに来られた。

今日話をしている興味深かったのは、お互いの魂が遍歴性という性質を持っているためか、二人ともこれまでは引っ越しを繰り返す人生を送っていたのだが、ここ最近ある拠点でしばらく落ち着くことを考え始めたということであった。私もつい最近までは、オランダを離れて別の国で生活をしようとしていたのだが、いろいろなことが重なり、しばらくはオランダで落ち着こうという考えを持ち始めている。

今日の会話の中でも出てきたが、私とデン・ハーグとの縁に関して言えば、小学校五年生の時の社会の授業中、資料集を何気なく眺めていたところ、デン・ハーグにある国際司法裁判所の写真を見つけ、自分はいつかそこで働くことになるということを直感的に感じた出来事がある。

確かに今私はまだフローニンゲンで生活をしているし、決して国際司法裁判所で働くわけではないのだが、国際司法裁判所のある平和宮の直ぐ近くに居を構え、そこで自分のライフワークに従事していこうと考えている。

社会の資料集を眺めたあの日から、気がつけば20年以上の月日が流れたが、今このようにしてデン・ハーグに居を構え、そこで長く生活をしよう決心している自分があることを本当に不思議に思う。そして何より、これまでのように生活環境を変えることによって自己を深めようとしていた自分はもはや希薄な存在になっており、デン・ハーグで長く生活をするによって、オランダ永住権と欧州永住権の双方を取得しようとする考えを持っている自分があることには驚かされる。これは自分のライフサイクル的な事柄とも関係しているだろうし、発達的な事柄とも関係しているだろう。デン・ハーグとの不思議な縁を大切にしながら、これからの人生を過ごしていきたいと思う。

友人との会話の中では、死についての話題も取り上げられた。生活環境が変わることそのものも死の体験であるということや、そもそも人が死ぬ直前の脳内現象や死に向かっていく際の感覚変容についても話題となった。さらには、異国の地で死を迎える「客死」についても少しばかり話をした。この客死については以前より何度も考えさせられることがあった。

これは非常に個人的な話であり、全てを明確に語ることはできないが、私の中で一つ見えているのは、日本に何かしらの貢献を果たすことに意義を一切感じられなくなったら日本に戻り、日本と深く接点を持ち、日本に対して何かしらの貢献をしようという意思があるうちは日本に戻らないだろうとい

うことである。これは一見すると逆のように思われるかもしれないが、自分の場合においては逆でありえない。母国に關与することを諦めた時、母国に帰るといふ決断をするであろうし、母国に關与することを繼續させようといふ意思がある限りは母国には戻れない。

この主題については形を変え、扱ふ角度と論点を変えて何度も書き綴ってきたように思う。一つだけ繰り返すとすれば、自分にできるわずかばかりの關与の形を生み出しているもの、それは何も欧米の大学院で得られた知識的なものというよりも、国の外で生活することによって涵養されていった感覺そのもの、さらには経験そのものだと言えらるう。

そうした感覺や経験を通じてでしか自分は母国と接点を持つことができず、母国に關与できないと知っている。国の外で生きざるをえないことを突きつけられたと以前は考えていたが、今はそれもまた自分の人生における一つの役割であり、それを率先して引き受けようと思っている。その先には、やはり客死が待っているように思えて仕方ない。フローニンゲン:2019/3/9(土)21:11

No.1745: A Transient Life

It resumed to drizzle. I worry that a transient life might be washed away. Groningen, 12:19,
Sunday, 3/10/2019

3940. 今朝方の夢

どんよりとした雨雲が空を覆っている。そうした空の濁りとは対照的に、小鳥たちが清澄な鳴き声を上げている。

ここ最近は季節の変わり目であり、新たな季節に向けての準備なのか、睡眠時間が長くなる傾向にある。就寝時間は十時と同じであるにもかかわらず、ここ数日間は七時前に起きるような日が続いている。夜中に目覚めることもなく、このように十分な睡眠が取れていることは何ら問題ではない。ただし、そうした睡眠時間の拡張を何が生み出しているのかについては、季節の移り変わりに向けた準備以外に何かあるかもしれず、引き続きそれが何かを探してみたいと思う。

まずはいつものように、今朝方の夢について振り返りたい。夢の中で私は、アメリカのどこかの都市を歩いていた。街を歩きながら、落ち着ける家を探しているようだった。だがしばらくすると、私はヨー

ロッパに戻りたくなってしまった。そのような思いを抱いた瞬間に、私の体は日本にあった。久しぶりに日本の大地を歩く時、なぜだか寂寥感に囚われてしまい、自分はまだ日本に戻ることはできないという強い思いに襲われた。再び欧州の地で生活をしようと思った瞬間に夢の場面が変わった。

ちょうど今、上空の雨雲から雨が降り始めた。今日は一日中雨とのことである。特に昼前から雨が激しくなるようであり、そこからは雨は止むことなく降り続けるようだ。明日以降の天気予報を確認してみると、来週一週間はなんと全て雨マークである。もちろん、一日中雨が降るわけではないことがオランダの天気の特徴だが、一日も晴れマークがないというのは少々残念だ。そうした状況にあるのであれば、その状況そのものを何の判断もなしに受け入れ、雨を味わい、そして楽しむ姿勢を持ちたいと思う。こうしたことを続けていけば、いつか雨を味わおうとせずとも味わうことができ、楽しもうとせずとも楽しめる日がやってくるだろう。

今朝方の夢についてももう少し振り返りをしておきたい。次の夢の場面では、私は地元の街にいた。そこは街というよりも村に近い印象だが、そこで私は二人の友人(KF & HY)と再会した。小中学校時代の親友であった一人の友人が、私にある紙を見せた。実はその時私は昼寝をしており、昼寝から目覚めた瞬間に、彼は私にその紙を差し出したのである。見ると、それは不動産に関する広告であり、何やら彼は、59,800,000円の一軒家の投資物件(年利6.9%)を購入し、資産を運用したいとのことであった。その広告を見る限りにおいては、物件はまともであり、利回りに関しても高すぎず、低すぎずといったところだろうと思った。彼に私は、自分が思った比較的肯定的な意見を伝えた。すると、彼は微笑み、その物件に投資する方針を固めたようだった。

なぜか彼は私の手を取り、散歩に行こうと持ちかけた。散歩に出かけ、少し起伏のある山道を下っている時に、通りに咲く大量の桜を目にした。私はその時思わずその場に立ち止まり、桜の美しさに大いに感動した。「日本の桜は本当に素晴らしいよね」という言葉が自然と私の口から漏れた。友人はそれに対して何も言わず、ただ笑みを浮かべたまま桜を見ていた。フローニンゲン:2019/3/10(日)07:43

No.1746: A Rainy Day

It is raining very hard with strong winds. Even if the weather is unstable, I'll continue to devote myself to my lifework. Groningen, 14:44, Monday, 3/11/2019